

琴ことを弾かないかぐや姫

岡田 ひろみ

一 女の教養としての音楽

平安時代の貴族にとって音楽が、日々暮らしてゆく中で、大きな楽しみの一つだったことは「遊び」が「管絃」を意味することにも表れている。公的な場でも私的な場でも、男性も女性も、集団で個人で、笛を吹いたり琴を奏でたり、人々は様々に楽しみ心を慰めた。村上天皇の女御となった藤原芳子が幼い時、父親（師尹）に、「一つには御手（習字）を習ひたまへ。次には琴ことの御琴ことを人よりことに弾きまさらむとおぼせ。さては古今の歌（古今和歌集）二十卷をみな浮かべさせたまふを御学問にはせさせたまへ」（『枕草子』「清涼殿の丑寅のすみの」）と教えられたエピソードは有名だが、美しい筆跡、和歌とならんで音楽（ここでは特に琴こと）に秀でることが、未来のお妃教育の一環として必要とされたことがよくわかる。お妃教育というわけでなくても、『落窪物語』の女主人公である姫君は、幼い頃母親に死に別れたにもかかわらず、異母弟に箏の琴を教えるほどの上手として描かれているし、『源氏物語』の中で紫の上は、光源氏から琴を教わっている（後に描かれる女樂では和琴を担当する）ので、当時の姫君の教養の一つとして「音楽」（女の場合は琴こと〔箏・和琴・琴こと・琵琶など絃楽器の総称〕）の才能は重要視されたのだろう。それは、素晴らしい男性を引きつけるためのみならず、当時女性の行動範囲が限られていることを考えれば、日々のつれづれを慰

める手段として有効だったに違いない。

ところで、高畑勲監督による映画『かぐや姫の物語』（スタジオジブリ・二〇一三年）の中には、かぐや姫が琴を奏でるシーンがたびたび描かれている。映画の中で、富裕層となった翁は、都の女房を教育係として雇い、様々な教養をかぐや姫に身につけさせており、先に触れたような当時の女君の教養の一つとして「琴」があったことも考え合わせると、かぐや姫が琴を奏でたとしても、もちろん不自然ではない。しかし、実は『竹取物語』にかぐや姫が琴を弾く場面は全く描かれていないのである。和歌の贈答はあっても、男君との合奏はもちろん、独奏場面もない。そもそも、かぐや姫は、琴を弾かなかったのだろうか。それとも弾かなかったのだろうか。『竹取物語』のかぐや姫が、音楽に携わらない人であることについて拘ってみたい。

二 『竹取物語』の中の音楽

『竹取物語』の中に、全く音楽に関する叙述がないわけではない。五人の貴公子及び、帝に関わる部分に一箇所ずつある。

五人の貴公子に関わる音楽描写は、かぐや姫へのアプローチの一つとしてある。そこで、彼らがどのような形で、かぐや姫に求婚したか確認しながらみてゆく。かぐや姫が裳着を終えたあと、「世界の男そのこ、あてなるも、賤しきも」心を乱し争って求婚する。全く相手にされないことに断念する男たちが多く中、残ったのが五人の求婚者たちであった。

その中になほ言ひけるを、色好みといはるるかぎり五人、思ひやむ時なく、夜昼来たりけり。その名ども、石作の皇子、くらもちの皇子、右大臣阿部御主人みうし、大納言大伴御行みゆき・中納言石上磨足、この人々なりけり。

世の中に多かる人をだに、少しも容貌かたちよしと聞きては、見まほしうする人どもなりければ、かぐや姫を見まほしうて、物も食はず思ひつつ、かの家に行きて、たたずみ歩きけれど、甲斐あるべくもあらず。文を書きてやれども、返事もせず。わび歌など書きておこすれども、甲斐なしと思へど、霜月・師走の降り凍り、水無月の照りはたたくにも、障らず来たり。(二十頁)

まず彼らが行ったのは、竹取の翁の家に行つてたずんだり歩いたりすることである。垣間見する機会をねらつてであるが、何の甲斐もない。手紙を送るけれども返事は来ない。「わび歌」(相手を思つて嘆く歌)つまり恋歌を書いて送つても効果はない。それでも五人はあきらめない。どんな悪天候でもやってくる。夕暮れ時になると、「例の」(いつものように)竹取の翁の家に男たちは集まつた。

日暮るるほど、例の集まりぬ。あるいはは笛を吹き、あるいは歌をうたひ、あるいは声歌しやうがをし、あるいは嘯うそを吹き、扇を鳴らしなどするに、翁、出でていはく、「かたじけなく、穢きたなげなる所に、年月を経てもものし給ふこと、きはまりたるかしこまり」と申す。(二三頁)

手紙を送つても、和歌を書いても返事をもらえなかつた男たちがとつた次の手段は、笛を吹いたり、歌をうたつたり、声歌(笛などの楽譜の旋律を口ずさむこと)をしたり、口笛を吹いたり、扇を鳴らしてリズムをとつたりすることであった。手紙や和歌に対しての返事がもらえないということは、かぐや姫が自分達の手紙を読んでもくれたかどうかすらわからない、ということでもある。そこで男達は、手紙や歌という言葉で心情を述べることが可能だが、音楽であれば聞かないと届く音楽を用いることにしたのではなからうか。手紙は読まないということが可能だが、音楽であれば聞かないと

いうことは不可能だからである。たとえ返答（反応）がなくても、自分の想いをのせた音楽は「音」であるがゆえに、必ずかぐや姫の耳に届くということが保証されている。物語において、この音楽がかぐや姫の心に届いた、という風には描かれませんがその代わりに翁が五人の前に登場する。そして、このあといわゆる難題をそれぞれに課するのである。これまで全く返事も甲斐もなかったことを思えば、かぐや姫の望みの品を持参すれば求婚を承諾するという一歩進んだ（色良い？）返事が、音楽を奏するという行為のあとに、描かれてゆくとともに、「音楽の力」というようなものを感じ取ることができる。付け加えるならば誰が何を演奏したは書かれていないことも面白い。ここは人物と楽器が結びつくことに力点があるのではなく、「音楽」を奏でたという事実重点がある描写ということである。

中将、人々引き具して帰り参りて、かぐや姫を、え戦ひとめずなりぬること、こまごまと奏す。葉の壺に御文そへて参らす。ひろげて御覧じて、いとあはれがらせたまひて、物もきこしめさず。御遊びもなかりけり。（七六頁）

かぐや姫を留めることができなかつたことを聞いた帝は、形見の品の不死の葉や手紙を見て、悲しみのあまり、何も口にせず、「御遊び」といった公的な管絃の演奏会といったこともしなかつたという。「御遊びもなかりけり」は、帝の悲しみの深さを語る表現としてある。例えば、桐壺更衣の死後、弘徽殿女御が「月のおもしろきに、夜更くるまで遊びをぞしたまふ」のを聞いて、桐壺帝が「いとすさまじうものし」と感じたように、『竹取物語』の帝も、宮中での「遊び」をやめるほど、心傷ついているのである。文末の「けり」は、「管絃の宴もないほどの帝の悲しみの深さなんですよ」という語り手の詠嘆が込められている。

『竹取物語』にある音楽の記述は以上の二点のみであった。つまり、『竹取物語』は物語の作品形成に音楽をほとんど用いなかった作品であるといえる。後に続く『うつほ物語』『源氏物語』『夜の寝覚』『浜松中納言物語』『狭衣物語』など、多くの作り物語が、物語の中に音楽を多く深く取り入れていることを考え合わせると、ある意味異質でさえある。とはいえ、『竹取物語』の音楽の叙述が、かぐや姫に求婚する五人の貴公子と帝という主要な男君たちに聞わせてあり、目立つ形でないにしても、物語の中に意味をもつて織り込まれるということもできよう。そう受け止めると、かぐや姫が琴を演奏する場がないことも深読みしたくなる。桐壺帝が亡き更衣のことを、「心ことなる物の音をかき鳴らし」（桐壺巻）ていたと想起するような音楽での交流は、五人の貴公子たちとはもちろん、帝とかぐや姫の間にもないままであった。更にいえば、合奏はもちろん、かぐや姫の独奏もなかったのである。そしてそれは、かぐや姫が琴を弾けなかったということではなく、物語はあえてかぐや姫に琴を弾かせなかったのではなかったか。かぐや姫は「月の都」の人であり、天人に迎えられ昇天した。そもそも「天人」は極上の音楽を奏で、愛でる人なのである。「月の都」の人であるかぐや姫に音楽の才がないはずはない。

三 音楽による天との交流

天人と音楽が深く関係することは、王朝物語からも読み取れる。『うつほ物語』の大きな柱の一つに、俊蔭一族四代にわたる秘琴ひきん伝授があるが、その秘琴を手に入れたのが渡唐した俊蔭であった。

……阿修羅、木をとり出でて割り木づくる響あめわかみこきに、天稚御子下りましまして、琴三十つくりて上りたまひぬ。

かくて、すなわち、音声樂して、天女下りまして、漆ぬり、織女、緒よりすげさせて上りぬ。（俊蔭巻・二八

頁）

・春の日のどかなるに、山を見れば霞みどりに、林を見れば木の芽けぶりて、花園花盛りにおもしろく、照る日の午時ばかりに、(俊蔭が) 琴の音をかきたて、声ふりたてて遊ぶときに、大空に音声樂して、紫の雲に乗れる天人、七人つれて下りたまふ。(俊蔭卷・二九頁)

俊蔭は阿修羅に会い、秘琴を得るが、その秘琴を造つたのは、天から下りた天稚御子であり、妙なる音楽の響きにのつて天下り、琴に漆を塗つたのは天女だった。俊蔭が秘琴を手に奏でると、大空からまた妙なる音楽が鳴り響き、紫の雲に乗った天人が七人下りてくる。

弾琴で天人を降下させるのは、俊蔭の孫、仲忠も同様である。

仲忠、七人の人の調べたる大曲、残さず弾く。すずし涼、いやゆき弥行が大曲の音出づる限り仕うまつる。時に天人、下りて舞ふ。仲忠、琴に合はせて弾く。

朝ぼらけほのかに見れば飽かぬかな中なる乙女しばしとめなむ

歸りて、今一かへり舞ひて上りぬ。(吹上下巻・五三三頁)

宮中での仲忠と涼による琴の競演により、天女を降下させる。朝ぼらけの光の中で見た天女をこの世にもうしばらく引き止めたい、という仲忠の思いに応えるかのように、天女はもう一度戻り、そのあと昇天した。

『夜の寢覚』で小姫君は、八月十五夜の夜、夢の中で、天人から琵琶の奏法を伝授される。

……小姫君の御夢に、いとめでたくきよらに、髪上げうるはしき、唐絵の様したる人(天人)、琵琶を持て来て、

「今宵の御箏の琴の音、雲の上まであはれに響き聞こえつるを、訪ね参で来つるなり。おのが琵琶の音弾き伝ふべき人、天の下には君一人ものしたまひける。……」（巻一・一七〜一八頁）

小姫君が奏でていた箏の音色に惹かれ、琵琶を伝授しに下りてきたと言う。この天人は翌年の十五夜の姫君の夢に現れ、残りの奏法を伝授するが、そのまた翌年は現れなかった。

またかへる年の十五夜に、月ながめて、琴、琵琶弾きつつ、格子も上げながら寝入りたまへど、夢にも見えず。うちおどろきたまへれば、月も明けがたになりけり。あはれに口惜しうおぼえ、琵琶を弾き寄せて、

天の原雲のかよひ路とちてけり月の都のひとも問ひ来ず（巻一・二〇頁）

またもや夢にと期待しながら寝たものの天人は現れず、眼を覚まし、琵琶を弾き寄せて、歌に思いを託した。その歌は前引の『うつほ物語』の「朝ほらけ」歌と同様「天つ風雲の通ひ路吹きとちよ乙女の姿しばしとどめむ」（『古今集』雑上・僧正遍昭）を下敷きにする。『夜の寝覚』が『うつほ物語』、そして『竹取物語』を引くことは、弾琴による天人の降下や伝授、「八月十五夜」や天人を「月の都」の人として描いていることから明白である。そのほか、『狭衣物語』では男主人公が笛を吹くことで、天人が降下しており、天人と音楽がいかに関わりが深いと考えられてきたかよくわかる。かぐや姫の昇天場面が、イメージとして阿弥陀来迎図と重ねることも既に指摘のあるところだが、阿弥陀仏の周辺には楽を奏でる天人を多く伴っているのだった。映画『かぐや姫の物語』も同様のイメージでかぐや姫を昇天させ、周囲の天人たちは音楽を奏でている。

『うつほ』以下、すべて『竹取物語』以降に成立した作品であるが、当時の人々は天人と音楽の結びつきの強さを

既に知っており、そう考えるとかぐや姫に音楽の才がないとは考えられず、物語はあえて、『竹取物語』でかぐや姫に琴を奏でさせなかった、と改めて思うのである。

四 琴を弾かないかぐや姫

では、かぐや姫に琴を弾かせなかったのはなぜか。それは彼女が「月の都」の人だったからだろう。先に、五人の求婚者がかぐや姫を妻にと望み、竹取の翁の家の辺りをうろついていたのは、彼らがかぐや姫を垣間見したかったからだろうということを書いた。更に付け加えれば、かぐや姫が奏でる琴の音色を聞きたい、という願望もあったかもしれない。当時の男女は、基本的に契りを結ぶまで相手の顔を見ることはない。だからこそ、垣間見で恋に落ちたり、琴の音色に引きつけられて女と結ばれたりもする。『うつほ物語』の俊蔭女は、兼雅と初めて逢った際も琴を弾き、また、兼雅との再会の契機となったのも琴の音色だった。『源氏物語』において、光源氏が末摘花に興味を持った一因として、彼女が琴を弾くというのを女房から聞いたからであるし、須磨・明石を流離する光源氏は、明石の入道より、娘の明石の君が箏の琴の上手であることを聞き、より興味をかきたてられる。恋というものと無縁だった薫が宇治の姉妹に惹かれたのは、二人の演奏を耳にし姿を垣間見たからであった。恋物語において、音楽は男女を結びつけるための契機となる。一方、誰とも結婚する気がないかぐや姫は、琴を奏で男の気持ちをかきたてるようなことはしない。それだけでなく、「月の都」の人であるかぐや姫が琴を奏でるという行為は、「月の都(天)」と交流することということに繋がったのではなかったか。

市川崑監督『竹取物語』（東宝・一九八七年）では、かぐや姫（沢口靖子）は、八月十五夜の日の昇天を水晶玉での天との通信によって知る。この映画でかぐや姫は宇宙人として描かれ、宇宙船（UFO）から発せられる光にのって昇天するのだが、『竹取物語』のかぐや姫は、いつどのようにして昇天を知ったのだろうか。これも、物語には描

かれず想像するしかないのだが、あり得た方法の一つとして音楽による交信があげられる。それが、当時の人々にとって一番自然な「天」との繋がり方だったからである。しかし、かぐや姫は最後まで、琴を、音楽を奏でることはなかった。それはなぜか。深読みとして一笑されそうだが、かぐや姫の昇天の拒否、あくまでも地上の人でいたいというかぐや姫の思いが、琴を弾かない人としてのあり方に窺えるのではなからうか。

※本文引用はすべて、新編日本古典文学全集（小学館）による。